KURA 金沢大学学術情報リポジトリ
Kanazawa University Repository for Academic resources
金沢大学 KANAZAWA UNIVERSITY

Title	事実認識から態度決定へ―横山論文への批判
Author(s)	柴田, 正良
Citation	: 203-208
Issue Date	1996-08
Type	Book
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/2297/36538
Right	

*KURAに登録されているコンテンツの著作権は，執筆者，出版社（学協会）などが有します。
*KURAに登録されているコンテンツの利用については，著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
*著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には，著作権者の許諾を得てください。ただし，著作権者から著作権等管理事業者（学術著作権協会，日本著作出版権管理システムなど）に権利委託されているコンテンツの利用手続については，各著作権等管理事業者に確認してください。

http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/

事実認識から態度決定へ
——横山論文への批判

柴田正良

そこにあるものは
そこにそうして
あるものだ
——石原吉郎「事実」,『サンチョ・パンサの帰郷』から

1．横山の主張の眼目は，科学知識のみならず哲学の「文脈依存性」を事実として明らかにすること，そしてその系として，日本(という歴史的社会的文脈)における哲学が専門家の「お家芸」的な狭い関心領域に縛られた結果，知識論においては「自然化された認識論」がいわゆる物理主義的認識論のみに偏って理解され，また哲学一般が本来の世界観的機能を失ってしまった，ということをこれまた事実として指摘することである。横山の観察は極めて冷静で，尊重すべき洞察を多く含んでいるが，しかし彼がそれらの事実を「事実としてのみ」差し出す慎重この上ない手つきは，あまりにこの国の哲学解釈の「文脈」に支配されすぎていはしないか。事実とはまさに「そこにそうして／あるものだ」が，われわれが本当に知りたいのは新しい事実というより，その新しい事実を事実として発見させてくれる新しいものの見方，捉え方である。横山が科学知識を「特殊西欧近代の産物であり，キリスト教的な性格を強く刻印されている」ものと規定するとき，われわれが知りたいのは，ではこれからの科学知識のあり方を「全体的イデオロギー」との関係でどう理解すべきかということなのだが，彼は事実を越える「ヤバイ」主張にはコミットしない。また哲学は世界観的機能を回復させるべきだと横山は暗に言っているように見えるが，彼は自分の提唱する世界観を一向に明らかにしようとはしない。わが国の哲学はいまや積極的に世界観を提供すべきなのだ，という事実を他人ごとのように指摘するやり方は，哲学に当事者として携わっている者としては余りに「評論家的」ではないか。横山論文に欠けているのは事実についての知識ではなくヴィジョンであり，私はそれを彼に対する無いものねだ

りだとは思わない。奇妙なことは，哲学は職人集団の「秘かな楽しみ」に耽ってばかりいないで社会や世間の様々な論争をリードするようになるべきだ，という至極まっとうな主張をする横山自身が，その議論において，「イカガワシイ」話を本能的に避けて可能な批判を最小限に封じ込めておこうとするわが国の哲学業界特有の禁欲主義に陥っていることである。このネジレは実は，哲学的思考に対する横山の硬直した見方に由来するのではないか。私の不満をもう少し具体的に述べてみよう。

2．単刀直入に横山への問いを述べればこうなる。(ア) いわゆる科学知識の背後（？）にある「全体的イデオロギー」とは何か。そしてそれが明らかにされたとき，われわれは科学知識の未来とその全体的イデオロギーに対していかなる態度を取るべきなのか。横山は，「西欧近代における科学とキリスト教の密接な関係の存在という歴史的主張」をするのみならず，現在の欧米の科学知識に対しても存在する「裏返しのものも含めたキリスト教の影響」を一つの経験科学的な仮説として主張している。私は，その経験的な主張の妥当性をここで問題にしようとは思わない。しかしその仮説を弱い意味で理解するなら，それは問題にするのもバカげたほどの自明な主張であろう。すると横山はそのような弱い主張ではなく，キリスト教思想そのものが科学知識の全体的イデオロギー（の少なくとも中心部分）に他ならないという強い主張をしているのだろうか。もしその答がイエスなら，問いはさらにこうなる。(イ) 横山は，科学知識をそのような全体的イデオロギーから完全に脱却させるべきだと言っているのか，それともそのようなことは土台無理なことなのだからそれにコミットせよと言っているのか，それともそうしたイデオロギーを改善（？）しようと言っているのか，いずれなのだろう。わが国の欧米科学の受容におけるキリスト教無視は「ある意味ではそれでよい面もある」などというどっちつかずの態度は，毒にも薬にもならない。科学知識そのものが「近代西欧起源の歴史的文化的に特殊なもの」であるという主張も曖昧である。起源はいいとして，科学知識はこれから先も「歴史的文化的に特殊なもの」に留まり続けるのか。そうするとわれわれは実は「本物の科学知識」をこれまで持ったこともなく，その全体的イデオロギーに同化するまでこれから先も持ちえないのか。また欧米以外の国々やキリスト教以外の宗教圏における科学の成功は，どう理解したらよいのか。それとも科学知識の「表層」と「深層」などというウサ

ンクサイものを，結局は持ち出すのだろうか。ここには，口当りのよい相対主義的な言辞をそのままに放置し，その苦い帰結を少しも突き詰めてこなかったわが国の「哲学的文脈」がはしなくも現われているように思われる。

だが他方で横山は，科学知識の全体的イデオロギーの捉えにくさを指摘し，それを自覚化するための方法論を模索しているようにも見える。すると実はその全体的イデオロギーは，まだ誰も正確に正体を摑んだことのない何かなのか。知識が自己に対する妥当な批判を常に「新たな知識断片」としてそのシステムの中に取り込むような，いわば膨張幻想に憑かれた帝国主義であることはよく分かる。知識はその外部に「無知」や「狂信」や「蒙昧」をもつことはできても，「別の知識」は決してもちえないのだ。すると科学知識の全体的イデオロギーの自覚もまた，必然的に知識であらざるをえない（だから「西欧起源の特殊な形態の知識」などというのは一種の形容矛盾だろう）。であるなら，自覚化のために呼び出される「他者性」といった仕掛けもまた，所詮は知識拡張のための道具にすぎないのではないか。「他者性」などと言えばなにやら現象学風に聞こえはいいが，要するに，知識の新たな領域を開拓するためのちょっとしたショック療法といった程度ではないのか。もしそうでないなら，ことは横山にとって深刻である。というのも彼は「知識」と「反知識」の形而上学的弁証法とでもいったものを展開してみせねばならないからだ。それはともかく，横山に対する三つ目の問いはこうである。(ウ) 彼の期待する「第三世代の科学論」とは実質的には何なのか。横山は，知識社会学の「第一世代」と「第二世代」を軽く捌いた後で，「従来の自然科学と人文社会科学の間の区別を横断してしまうような」，「人間関係などと……例えば微生物などを同等の資格で説明に取り込もうとする」ような第三世代の科学論の可能性に言及している。しかし，これが海のものとも山のものともつかぬという点で横山の論難する「知識物理学」と甲乙つけがたい代物ではないか，ということは措くとしても，理解しがたいのは，この第三世代の科学論によって今までと異なったどのような意味で科学知識の全体的イデオロギーが自覚化されるようになるのかという点である。この「第三世代」にコミットすると何がお得なのかということが明らかにされない以上，われわれはまたしても知識社会学の現状についての事実を教えてもらっただけなのである。

こと科学に関する限り，横山が「日本という他者性」で主張したいことは何な

のか。確かに，欧米と日本の科学者では科学に関する思想的バックグラウンドが違う，という点をわれわれは改めて彼から学ぶわけだが，それでどうだというのだろう。生まれてすぐ神社にお参りをし，教会で結婚式を挙げ，死ねば仏式の葬儀を執り行うというのも珍しくない日本こそ宗教に関して世界で最も進んだ国である，と言ったのはローティだったか。そこで例えば，「…イズム」や「…教」といったものを時と場合によって都合よく使い分けることの方が科学知識にとって健全なのだ，という態度表明があったとするなら，それに対して横山は何と言いたいのだろうか。

3．「自然化された認識論」を「物理主義的認識論」とのみ解する専門的哲学者たちの偏狭さを批判する点で，横山は正しい。しかし，その物理主義的認識論を理解する点で横山はかえって偏狭ではないか。彼に対する四番目の問いはこうである。(エ) 物理主義的認識論のプログラムを進めようとする者は，いわゆる「社会化された認識論」を含めた他の知識論の可能性をなぜ排除しなければならないのか。私は（横山とは別の理由から）戸田山が最終目標にしているような「知識物理学」が可能だとは思わないが，しかし仮に私が戸田山だとしても，知識に関して心理学や社会学や文化人類学が明らかにする知見を拒絶する理由はまったくないだろう。知識に対するどのようなアプローチが実りあるのか，などというのは簡単に決着のつくことではないのだから，「あれも知識論，これも知識論」で当面はいいではないか。出走前の馬の品定めに血道をあげるより，とにかく走らせてみればいいのだ。案ずることはない，いずれマトモなものは残りツマラナイものは消え去るだろう。

しかし横山が知識物理学の信奉者たちの偏狭さを批判する本当の理由は，他の研究方法に対する彼らの態度というよりはむしろ，「自然化された認識論」を主張しながらもなお彼らが実際には「哲学」をやっているという不満にあるようだ。というのも彼らは「超越論的な哲学に対する不信と，経験科学に対する信頼」から出発しながら，結局は，「科学知識の実際の性格を明らかにすることではない」別の問題，つまり「超越論的哲学の問題」や「形而上学的問題」に舞い戻ってしまったから，というわけである。だがこれはまた哲学と経験科学に関するなんと古くさい二分法なのだろうか。アプリオリズムと実証的方法の亡霊のような二元論ではないか。クワインが「自然化された認識論」を提唱したのは，哲学が認識

や本質に関する「特権的」知識を独占しているわけではなくむしろあらゆる分野の知識は相互に連続しているという「連続性テーゼ」の帰結としてであって，それゆえ認識論についてもまた手持ちのあらゆる知識を用いて研究すべきだということなのである。したがって横山が懸念するような哲学のアプリオリズムの復活などどこにもありはしない。哲学と経験科学はもとから緩やかに連続した知の営みなのだ。だから一方で，知識と信念の内的論理を探究しようとして主に概念(／モデル）分析に頼るならそれは「哲学的」だろうし，また他方で，知識現象の範囲を確定しようとして科学知識の歴史的研究を行うならそれは「経験科学的」だろう。その中間のありとあらゆるヴァージョンもまた，知識論の「超越論的独占」などという世迷い言を言い出さない限り「あれも知識論，これも知識論」なのだ。それゆえ「知識物理学」論者もまた行けるところまで行ってみればいいのであって，旧態依然としたカビ臭い「哲学」観に基づいた忠告などは余計なお世話であろう。

4．この国の哲学が「全く専門的な一分野になってしまい，知的な総合とか世界観的な機能を失ってしまい，社会において論争をリードすることができなくなってしまっている」という横山の嘆き（？）に私はまったく同感である。これがわが国の哲学の「文脈依存性」かどうかはともかく，文献解釈の悦楽に骨の随まで溺れて，なすことといえば秘教の花園で自分たちの偶像との一体感を勝ち得ることだけ，というのが確かにこれまでの哲学の現状であった。その間に，プラトンやカントやヘーゲルの名を戴けば大学の同僚たちの尊敬と畏怖を当てにできたなどという幸せな時代はとうに過ぎ去り，今や哲学はあらゆる場面で無用の長物に成り下がってしまったように見える。われわれ哲学の徒が秘かな自慰の楽しみに耽っている間に，われわれは，周囲の現実に問いかけることも，周囲の現実から問いかけられることもすっかり忘れ果ててしまった。その結果がご覧の通りだ。横山はこの状況を憂いて，しきりに哲学の「世界観的機能」を召還したがっているように見える。私にはこの「世界観的機能」が正確には何であるかが分からないが，これが横山に対する私の最後の問いである。(オ) 横山さん，あなたの提唱する哲学的世界観とは何ですか。

横山がこの問いにいつまでも答えずに，世界観的機能の回復の必要性を事実としていたずらに指摘することだけに終わるなら，むしろその主張は物陰からの無

責任なアジテーションに堕してしまうだろう。というのも，哲学が現実的状況との相互交渉を開始するために，必ずしもそのような大がかりな仕掛けが必要だとは思われないからである。同様に，ここで横山の示唆するように余り勇ましくなる前に，例えば科学的実在論が社会や倫理の問題において貫くべきその哲学的立場を本当に持っているのかどうかを冷静に検討してみることも必要だろう。大事なのは，札ビラを威勢よく切って「これが哲学だ」式の宣言を振りかざす硬直した発想から哲学を解放し，様々な戦線で小銭でやりとりする「あれも哲学，これも哲学」式のしなやかなゲリラ的発想を積極的に認めることではないか。例えば，哲学の一般向け解説書を書店にたくさん並べる「有能な」書き手たちと，大学の講壇で微に入り細をうがった哲学解釈をする「有能な」教え手たちとが，相互に軽蔑と不信を抱き合うような不幸な構図は改めねばならない。哲学的思考の多様さとそれを展開する仕方の多彩さを率直に認めて，様々な領域の問題に素直に反応するからこそ，「あれも哲学，これも哲学」なのである。まさかこの寛容さを論争を避けるための馴れ合いと勘違いする素っ頓狂な向きはないと思うが，ありもしない「哲学」の一枚看板を後生大事にする余り，オウム真理教やいじめ問題に対する仲間の哲学者の発言を尊大な態度でたしなめるようなことはもう終わりにしたいものだ。誤ったことを謝るのを恐れるばかりに誤ることを恐れるのは，愚の骨頂である。そのような姿勢で「哲学」を大学教育の床の間（？）に飾っておいてもらっても，何の足しにもなりはしない。われわれは，哲学がそもそも理屈のつけ合いの果てしない面白さだということを忘れてしまったのではないか。われわれは，哲学こそ人類の最後にして最大の知の「遊び」だということを，声高にではなくとももっとはっきりと言うべきではなかろうか。